『白鯨』の現実と非現実
――二つの宣誓をめぐって――

本多史弥

ハーマン・メルヴィルは、十九世紀の半ば、すなわちアメリカに近代リアリズムが入ってくる以前の作家である。したがって現実模倣に関してリアリズムよりも遅れをとっていたという見方が根強い。しかしなまじリアリズムの影響を受けることが少なかった分、逆にはるかに進んだ独自の意識に到達し得ているという風に見るむきも最近増えてきた。言いかえると、メルヴィルをポストモダンの先駆者であるとする見方である。本論では、その点について代表作『白鯨』（一八五一）における現実の取り扱われ方という観点から考えてみる。

『白鯨』全一三五章のうち、本論では第四五章と第五四章の二箇所のみに検討を加える。第四五章は、「宣誓供述書」である。そこでは、マッコウ鯨が驚異的な破壊力で捕鯨船を沈没させてしまったという信じがたい実例が報告されている。そしてイシュメイルは「自分は事件の当事者と直接会って話を聞いたことがある」という風に最後にその事件の信憑性を宣誓するのである。

けれども、イシュメイルというのは、メルヴィルの作り出したフィクションの存在にすぎない。それが現実に起こった出来事の当事者に会ったということは、まずあり得ないことだ。しかし、のちのそれらの出来事はすべて作家メルヴィル自身の実体験であることが、研究者たちによって確認されている。つまりこの宣誓は、ノンフィクションの宣誓なのである。メルヴィルはここで、非現実の語り手イシュメイルの口を借りて、自らの現実体験を宣誓しているといえる。そして語り手と作者の区別は混乱させられてしまっている。

このような語りの混乱は、作品全体のいたるところで見うけられるものである。そして批評家の中には、こういった語りの混乱を根拠として、メルヴィルを近代以前の素朴な作家であるという風に見なす人達も出てくるわけだ。けれども一方、ポストモダン小説の典型的な特徴の一つも、語りの逸脱や混乱なのである。したがってメルヴィルが、意図的に語りを混乱させているのかそれとも単にいいかげんだったのか、という点に見極めをつけるのはそれほど簡単なことではない。

そこで、第五四章「タウンホウ号の物語」に注目してみる。ここでも同様の宣誓が行われているからである。タウンホウの物語を語り終わった後で、イシュメイルは「自分は事件の関係者に直接会って話をしたことがある」と宣誓する。これは先の宣誓とよく似ているが、実は根本的に異質なものである。それは前者がノンフィクションであるのにたいし、後者は完全にフィクションだからだ。もちろん、宣誓がフィクションであること自体は、特に問題にするには値しない。問題になるのは、ノンフィクションの宣誓のあとにフィクションの宣誓がやられているという事実である。つまりメルヴィルが第四五章で事実性にこだわるあまりあえてノンフィクションの宣誓をしたのであれば、第五四章のフィクションの宣誓は、その努力に矛盾することになるのである。なぜそのようなことをしたのだろうか。

従来批評家達によって、第五四章は、メタフィクションすなわ

ち作品全体に対する自己言及的意識の産物になっていると考えられてきた。それならば宣誓もそのように考えていいはずだ。つまりそれは、第四五章の宣誓の虚構性に対するパロディであると見なせるはずだ。

実は、第四五章においてもともとイシュメイルが嘘をついていることが明らかな箇所が知られている。そこでは四頭の鯨の名前が挙げられているが、そのうちさいしょの二頭は、現実に存在した鯨であったことが確認されている。しかし、残りの二頭については、実在が確認されていない。つまりメルヴィルが適当に名前をでっち上げたものらしいと考えられている。この場合前の二頭の鯨をノンフィクションの鯨、後ろの二頭をフィクションの鯨と呼んでいいだろう。事件の信憑性をなによりも尊重しているように見える第四五章でノンフィクションの鯨とフィクションの鯨が混ぜられているのである。

本当は、メルヴィルが明らかに存在を知っていたと思われるノンフィクションの鯨は、もう一頭いるはずで、その名前はモッカディックという。一目瞭然であるが、メルヴィルは、モッカディックからモウビィデックを作り出したのである。にもかかわらず小説中では完全に黙殺されている。むろんその理由は明らかであろう。白鯨物語の信憑性を高めようとして、モッカディックまで持ち出してしまえば、逆に、そこからモウビィディックを作り上げた創作の舞台裏までが明るみにでてしまい、かえってモウビィディックの虚構性が浮き彫りにされていまうからである。つまりここでは、フィクションの本当らしさ増すために、あえて事実が抑圧されていると言える。

ただし完全に抑圧されてしまっているとも言えない。それは三頭目の鯨がモーカンと書かれているからである。モーカンとモッカのあいだには、偶然とは思いにくい音韻上の類似が感じられる。おそらくモーカンというフィクションの鯨は、モッカディックというノンフィクションの鯨からの言葉遊びとして派生したものであろう。ということはここでメルヴィルは、モッカディックを意識的に黙殺したのみならず、なおかつ言葉遊びによって、作品に忍び込ませていることになる。

すなわち、一見限りなく事実にこだわっているように見える第四五章で本当に意図されているのは、ある程度の本当らしさを作品に導入しつつかつ、逆に作品の表舞台から、現実の鯨モッカディックを消し去ることと、それによって、非現実の鯨モウビィディックを導入する土台をを潜在的に作り上げることであったといえる。そして第五四章のフィクションの宣誓は、第四五章のそういった曖昧性への自己言及だと思われるのである。このように、フィクションとノンフィクションの境目自体を、自己言及的なパロディで壊していく遊び心には、ポストモダンな意識にきわめて近い感覚が感じられていいはずであり、そういった感覚がおそらく現代の作家たちの姿勢に相通じ、メルヴィルが今日特に再評価されているゆえんではないだろうか。